

ともに 生きる

やまゆり園事件 から半年

(ひ・がき・まどか)さん(33)に声をかけ、アルミ缶のに入ったポリ袋を手渡す。湯沢さんは「人見知りの円さんが笑うとうれしい。このふれあいが楽しいのよ」とほほえんだ。

曜日を決めて、空き缶回収に協力してくれる近隣住民宅をめぐる。約1時間かけて5軒ほどを回った。

檜垣さんは染色体異常による重い障害がある。この日はずっと助手席に座

っていた。ときおり「ん」と声を出し、相手を見つめる。1軒回るたびに会話が生まれた。荻原さんは「缶回収自体より、おしゃべりすることが大事なんです」。

「朋」は重い身体障害や知的障害のある人が、自宅やグループホームから通う場だ。運営するのは社会福祉法人「訪問の家」。重症心身障害児の母親たちが学校卒業後も集える場所がほしいと、1979年に作業所を作ったのが始まりだ。

■思いがある、話せなくても

横浜市栄区の桂台地区。生活介護事業所「朋(とも)」の車がマンションの前に止まった。職員の荻原浩孝さん(30)が呼び鈴を押すと、住民の湯沢淳子さん(73)が笑顔で外に出てきた。

「あら、よく来たね」

湯沢さんが助手席の檜垣円



法人は「一人一人が望んでいる(であろう)ことを実現させよう」という理念を大事にしてきたという。



法人が運営するグループホーム「ふぉーぴーす」も訪ねた。大きめの個人宅のような外観で、職員の支援を受けて4人の障害者が一緒に暮らす。

鈴木幸子さん(56)は脳性まひ。文字盤を指さして気持ちを伝える。歌手松山千春さんのファンで、部屋にはポスターがずらり。コンサートで名前を呼ばれ、「手紙、読んだからね。ありがとう」と観衆の前で言ってもらえたこともある。

25年前に父親が病気で倒れ、入所施設に移った。そのときの気持ちをつづった文章がある。

「しせつではおふろ、トイレの介助がおとこの人だった。いやだった。よるねるとき、ちはるのテープをきいていると職員が、でんきをけして、ちはるのテープを切ってしまった。もつとききたかったのにくやしかった」

施設に戻りたくないと言え、介助つきグループホームで暮らし始めた。

グループホームを統括する職員の田崎憲一さん(56)に手伝ってもらい、鈴木さんに話を聞いた。

「困っていることは何ですか」。質問を聞き取った鈴木さんは、ボードに書かれたひらがなを一文字ずつ、大きく震える指で示していった。「は」「な」と指したように見えた。

「話を聞いてくれないこと、ですか?」。記者が問い返すと鈴木さんは田崎さんの人さし指をぎゅっと握った。「はい」の印だ。

田崎さんは言った。「みんな思っていることはたくさんあるのに、言えなかったりうまく伝わらなかつたりして苦しんでいる」

重い障害がある人とどう意思疎通を図るのだろう。

ストレッチャーに横たわる高橋清文さん(20)は、目線を上に動かして「はい」の意思を伝える。

「天野さん(記者)と一緒に書き初めしたい?」。職員の言葉にじっとこちらを見つめた。「佐藤さん(職員)と一緒にならどうかな」と聞かれるとすぐに黒目が上を向いた。

数字が大好きという岡村宏彦さん(52)は、記者が差し出したノートに「4333」と書いた。「昭和43年のことじゃない?」という職員のヒントを得て、「メキシコオリンピックのあった年?」と聞くと、満面の笑みで親指を上げた。

島津賢作さん(49)と小林秀樹さん(39)のお出かけにも同行した。ときどきせきをしたり、うなったりする。電車に乗り、喫茶店に入っても、表情の変化はないように見えた。だが職員は帰り際、「2人とも楽しそうだったね」と満足げだった。



法人理事長の名里晴美さん(55)は「言葉が話せなくても何も感じていない人は絶対にいない」と言う。

やまゆり園事件から半年。記者はこれまで、この言葉を実感をもって理解できてはいなかった。

重い障害がある人たちと初めてじっくり接した。精いっぱい思いを伝えようとする姿が胸を打った。彼らが意思を伝えるとき、健常者の何倍ものエネルギーがかけられている。小さなサインを読み取るにも時間がかかる。そのぶん意思を通じ合えたときの喜びは、大きい。

朋の施設長の庄司七重さん(47)は「何か訴えてくれているようでも、分からずに終わることは多々ある。それでも、本人のいないところで大事なことは絶対に決めない。諦めずに聞こうとし続けることが大事なのだと、私たちは信じているんです」と語った。

(天野彩)